

—コレクションづくりの考え方と実際〈本の世界の見せ方〉—

明定義人（京都橘大学）

- 0 はじめに ここでとりあげるのは主に市販されている一般書
児童書やコミック、雑誌などには直接にはふれない
ここでは生活圏にある図書館を想定している
 予算はいつも限られている
 そのなかで〈本の世界〉をどう見せていくのか、が問われてきた
 選択と提供の違い

- 1 図書館の「棚」が物語ること

- 1-1 どんな選書がされているのか
 蔵書の構築は選書が中心になる
 分野を担当制にする図書館があつたりする
 選書する人が限られている図書館があつたりする
 どんな選書がされていても、
 結果としての蔵書は、図書館としての集団的な行為によるもの

- 1-2 図書館内での合意形成・意思決定
 そこには図書館員の「本」をめぐる考えが広がっている
 貴重な本を大切にする
 評論が多く並ぶ
 ひたすら時代を追い求める
 かくあるべき姿を提示する
 平均単価が高い、安い
 その意思決定がどういう過程を経ているにしても、
 結果としての蔵書は、図書館としての集団的な行為によるもの

- 1-3 図書館と地域との合意形成
 そこには図書館員の「利用者像」が反映されている
 利用者との日常的な関係は反映されているか
 資料収集方針と選択基準

「図書館の自由宣言」「図書館員の倫理綱領」
「公共性」を図書館はどのようにして保障するのか
図書館の「公共性」を、どう表現するのか
『公共性』 齋藤純一 岩波書店 2000)

1-4 「利用者を否定しない棚」

「よくわかる○○○」はよくわかるか
「159 (人生論)」でみてみよう
「370 (教育書)」でみてみよう
「利用者を否定しない」と「迎合」 大衆論という問題
(『市民の図書館』再読) 明定 みんなの図書館 2000. 12号)
「490 (医学) の「棚」を見てみよう 誰に向かっているかな

(『治療文化論』中井久夫 岩波書店 1990)

2 本の世界はどうなっているか

2-1 出版社からみると、

入門書・概説書・専門書・実用書・啓蒙書・雑学・教科書・問題集・
資格本・小説・エッセー……
下手な鉄砲も数撃てば当る、から、ロングセラーまで
ベストセラーというカンフル剤

2-2 図書館からみると、

主題で分類
形態で分類 絵本 雑誌
一般補助表 02 歴史 04 評論 05 逐次刊行物

2-3 商業出版以外の資料

行政刊行物、パンフレット
地域資料、自費出版

3 本を選ぶ

3-1 本は仮説だ

学問的教理は「仮説」として受けとめる
利用者の「要求」「嗜好」を「選択」として受けとめる

3-2 仮説としての選書

「正解」を並べているのではない
知識の体系と認識の論理

3-3 主題には選択枝がある

二者択一、三者択一、二項分析、……

3-4 選択枝の具体例

「陶芸」の場合 知識・鑑賞・作陶

「料理」の場合 食べたい・作りたい・儲けたい・見て楽しむ

「医療」の場合 治療する側・病気を知りたい・病気になってしまった

「株式」の場合 仕組みを知りたい・投資をしたい・株価を知りたい

「インテリア」の場合 見て楽しむ・知識を得る・活用したい

(『仮説実験授業のABC』板倉聖宣 仮説社 1997)

(『朝令暮改の発想』鈴木敏文 新潮社 2008)

4 利用者についての想像力

4-1 階層化時代の利用者像 「希望格差社会」 都市と農村

可処分所得の問題、生活の多様化

「2極化する社会」という仮説—どう2極化するのか

国際化と多文化化する社会と日本語

(『新・階層時代の消費』小沢雅子 日本経済新聞社 1985)

4-2 予約からのフィードバック 潜在的ニーズをいかにつかまえるのか

地域における「層—量」としてのニーズ

4-3 利用者を「量」として見る

対象とする利用世代を20年ごとに区切ってみれば

1960年生まれ以前・60～80年生・80年～00年生・00年生～

高度成長期を気にしてみれば

団塊世代の親世代・団塊世代(1947～49)・団塊ジュニア世代・

団塊ジュニアのジュニア世代

(『〈育てられる者〉から〈育てる者へ〉』鯨岡 峻 日本放送出版協会 2002)

5 選書をする図書館員としての私

5-1 図書館員であるまえに「私」がある

「私」の相対化

図書館員としての私は、N数の私、いろんなパンツをはいている

(『パンツをはいたサル』栗本慎一郎 光文社 1981)

5-2 選書をする図書館員の身体と心、そして知識・情報力

資料を知るための訓練

出版社のPR誌を読む 「みすず」1. 2月号「読書アンケート」

雑誌の立ち読みをする マイナーな雑誌に注意をはらう

新書を毎月1冊、読む 目次を見る

気になる著者、いいなあと思った著者の本はまとめて読み発想を学ぶ

中・高校生に人気のある本を読む

出版、出版社、編集者、書店についての本を読む

出版目録を読む などなど

(『経済学という教養』稲葉振一郎 東洋経済新報社 2004)

(『哲学に何ができるか』廣松渉・五木寛之 朝日出版社 1978)

6 配架の工夫

6-1 「書店に学ぶ」とは、何を学ぶことなのか

書店の魅力はあちこちに同じ本がある

書店の魅力は買われたら補充ができる

図書館には品切れ・絶版の本がある

6-2 NDCは数字が並んでいるだけじゃない

100-150 と 160-190 で分かれる

410-450 と 460-480 と 490 で分かれる

610-650 と 670-690 で分かれる

近くて、遠い 380 と 390 280 と 290

007 と 548

遠くて、近い 冠婚葬祭と式辞挨拶 旅行ガイドと観光地

植物学と園芸 医学と家庭衛生 家庭教育と育児

6-3 分類変更で見せる

日本の名随筆 『心』 104 『味』 596.04 『笑』 141.6
食の随筆 は 596.04 か 914.6 か
飲食店のガイドブックは 596.02 か 291 か

6-4 配置で見せる 図書館は書庫が開架になっただけではないか

開架と閉架で見せる

雑誌は雑誌架に並べるだけではない バックナンバーは廃棄？

雑誌の付録の活用

6-5 一般書と児童書の「混配」 高月町でのこころみ

369.27 障害者福祉

『作業療法士が選ぶ自助具・生活機器』

『肢体障害をお持ちの方のための初めての旅行術』

『障害者と私たちの社会：障害者を知る本』

『ドラえもんの車いすの本』

『聴導犬：社会でかつやくするイヌたち』

『わたし いややねん』

『ぼくのおにいちゃん』

『えらいぞサーブ！：主人をたすけた盲導犬』

『たくさんのふしぎ No. 176 聴導犬物語 ジェミーとペッグ』

6-6 絵本を「形式」分類から、主題分類へ

育児・しつけ絵本 乳幼児向け絵本

物語絵本 子ども向け YA向け 美術としての絵本

主題のある絵本

6-7 仮説として「教育」の分類変更 教育学と教育技術の分離

一般補助表「07 研究法. 指導法. 教育」を使って

7 配架スペースの工夫

7-1 サインの工夫 日常語の活用

「生き方」「話し方」「書き方」「美しくなる本」

「教え方」「学び方」「生活術」

7-2 開架スペースの構造と書架の並び

デッド・スペース はどこか
どこに 注目させるのか
なにを、すててかかるのか
なにを、見せたいのか

「新刊」に過度の期待は出来ない
今日の「棚」は昨日の出がらし
資料群で見せる

8 おわりに

8-1 利用者と本（知識・情報）の関係をつくりだす役割
仮説として読み、判断する読者・利用者

8-2 利用者の「欲望・欲求」を促すために「棚」はある
「欲望・欲求」を「知的好奇心」につなげる

8-3 「たのしい貸出」に向けて

「たのしい×わかる」

	わかる	わからない
たのしい		
たのしくない		

「たのしい×たのしくない」

	教師がたのしい	教師がたのしくない
生徒がたのしい		
生徒がたのしくない		

	図書館員がたのしい	図書館員がたのしくない
利用者がたのしい		
利用者がたのしくない		

(『たのしい授業の思想』板倉聖宣 仮説社 1988)

8-4 村野藤吾「99%は施主、1%は建築家」=建築家1%論

（『建築をつくる者の心』村野藤吾述 ブレーンセンター 1981）
（「社会的芸術としての建築をつくるために」村野藤吾
「新建築」1980年1月号掲載 「著作集」所収）

「社会的芸術としての建築をつくるために」から

「私がよくいう言葉ですが、九九パーセントのところまで、それでみんな出てくる。（九九パーセントまでは建築家は謙虚に後に引いて聞く）。そこまでは理屈でいえるわけです。つまり二二が四のように割り切れることなわけです。何たって社会は『数』ですから、みんな『数』にかかわっているわけだから割り切れる。『数』の中へ入ったら、弁証法というものがあるわけです。それからいろんな問題、矛盾だとかの問題があつて社会は動いていく。ところが（九九パーセント引いても）一パーセントは残る。それが村野です。私はいつもそういうんです村野自身でさえどうすることもできない一パーセントなんです、これは。いくら理屈をいったって村野に頼んだ以上、村野をどうすることもできないでしょう？」

「その一パーセントが、ときによっては建築の全体を支配することができるかもしれない」

「クライアントに渡すということは、社会に渡すということと同じです。つまり自分のやった作品というものが、社会において評価し直されるわけですね。（中略）建築の仕事は、建築『作品』なんていう甘い性格のものではなくなってくるのですよ。だってもともとが『資本』でしょう？それを組み立てて新しい目的のものにつくっていく。」

図書館・図書館員にできることは1%

あとの99%は社会の側にある

「利用者が楽しくない×図書館員が楽しい」 は 99%が図書館の側にある